

ねんど
2024年度

とくていひえいりかつどうほうじん
特定非営利活動法人つどい

じぎょうほうこくしょ
事業報告書

I 法人理念を踏まえた事業運営

当法人は、法人理念を事業運営の基本として、地域における障害者福祉の増進の実現に向けた事業運営を行ってきた。

【法人理念】

「誰もが自分らしく地域で暮らしていける社会を作るために、
障害者本人・家族・支援者が共に感じ、共に学び、共に行うことから始めます。」

II 令和 6 年度 法人運営について

1 当法人を取り巻く状況等

(1) 障害者総合支援法改定に伴う地域との連携

昨年 4 月に改正障害者総合支援法が施行され、「障害者が希望する地域生活を実現する地域づくり」、「社会の変化等に伴う障害児・障害者のニーズへのきめ細かな対応」、「持続可能で質の高い障害福祉サービス等の実現」を柱とし、障害や難病を抱えていても安心して暮らせる地域共生社会の構築を目指すことがより明確になり、障害者本人による意思決定への支援や地域生活支援の充実が更に重要となった。

世田谷区においても、今年度から「新せたがやインクルージョンプラン」に基づく施策が展開され、当法人が受託する地域障害者相談支援センターや自立体験事業などに求められる役割が大きく多岐に渡ってきており、地域内の多職種との連携が欠かせないものとなってきている。

また、コロナ禍において途絶えていたボランティアや近隣団体との交流は少しずつではあるが再開され、地域との連携や関係性が再構築されてきている。

(2) 障害者本人・家族等の高齢化に伴う新たな問題への対応

利用者の高齢化によって身体的な支援の増加がみられ、生活環境の変化に伴う精神面への配慮や支援も必要となっている。体調不良による施設の利用率低下や支援の増加など、これまでとは違ったかたちでの課題が生じてきた。また、支える側であった家族の高齢化による支援力の低下などにより、グループホームを含めた新たな生活環境への移行も含めて、利用者への支援のみならず、家族との連携、医療及び高齢・介護分野を含めた多くの関係者等とのチームによる支援などを行っていくことが求められた。

(3) 障害の重度化と医療的ケアへの対応

医療技術の進歩などにより、医療的ケアを日常的に要する障害児者の割合が多くなっている。世田谷区で公募する新規事業においても、医療的ケアを必要とする障害者や重度障害者への対応が含まれており、新たな通所先の確保が喫緊の課題となっている。また、既存の施設を利用している障害者の中にも、高齢化などに起因して医療的ケアが必要になるケースもあり、事業所や法人のスキルアップが新たな課題となっている。

(4) 介護や支援に関わる職員の確保と待遇の改善など

最近の人手不足により障害者福祉施設等で介護や支援に関わる職員の確保が困難になっている状況があるが、障害者総合支援法の介護給付費の処遇改善加算が見直されたり、東京都の独自事業として居住支援特別手当補助金事業が新たに創設されたり、行政でも他業界との賃金格差の是正が図られる状況にある。

2 運営の状況について

(1) 法人理念に基づいた利用者及び家族等に寄り添った事業運営の実施

サービス提供にあたっては、職員が利用者ご本人やご家族とともに「共に感じ、共に学び、共に行う」という法人の基本理念に基づき、利用者及び家族等と共に考え、生活介護（玉堤つどいの家・東北沢つどいの家）、身体障害者自立体験ホーム（なかまっち）、地域障害者相談支援センター（ぼーとたまがわ）、指

定特定相談支援（なかまっち相談室）、重度身体障害者グループホーム（グループホームきぬた）の5つの福祉サービスを6つの事業所で行った。

（2）ボランティアや関係団体と連携した多角的な視点をもった事業運営

社会環境の変化や支援ニーズの多様化にともなった活動や行事を安心・安全に工夫して行った。生活介護では、外出や宿泊行事を実施した。相談支援事業では、ボッチャ交流会や「カフェこみん」などの地域住民参加型のイベントを企画実施。多くの関係者・団体等との繋がりを再構築し、ボランティアや地域団体等との連携の再構築に務めた。

（3）高齢化に起因する二次障害や家族に対する支援の強化

障害者本人や家族の高齢化は、これまで以上に複合的な課題をもたらし、地域で生活を続けていくための家族による支援の基盤に大きく影響を及ぼしている。そうした状況の変化を掴み、適切な支援へとつなげていけるように、高齢・介護分野とも連携したチーム支援を行い課題解決に向けた取り組みを進めてきた。当法人でも個別のケースの状況に応じて、通所事業所と相談事業所で情報交換を行うとともに、自立支援協議会に参加するなど、様々な関係機関で協調してニーズに対処するように取り組んだ。

（4）障害特性の多様化や重度化に伴うニーズ変化の把握と法人のスキルアップ

高度な専門性のある医療機関や複数の特別支援学校などが存在する世田谷区の地域特性による障害者（児）の障害状況の変化を踏まえた上で、法人として今後の障害者福祉分野のニーズに的確に対応していくため、「中長期事業計画（令和6年～15年までの10年間）」の策定に向け議論を深めた。

（5）安定した職員の確保と高いモチベーションを保ちながらより安心して働ける職場づくり

厳しい採用状況に対応し安定した人材の確保を図るために人事制度の改善に努め、国の障害サービスの報酬改定や処遇改善施策などを踏まえて検討し、法人全体の職員の処遇改善を図るため、従来の手当の適用範囲の拡充や新たな手当の創設などを行った。

Ⅲ 重点目標と取り組みと成果

（1）地域生活支援拠点に対応した運営と地域づくり

「ぽーとたまがわ」の相談支援事業や「なかまっち」の自立体験事業・短期入所事業を中心に、世田谷区が掲げる「新せたがやインクルージョンプラン」の取り組みに沿った事業運営を目指し、地域生活支援拠点の面的整備に貢献した。その他の事業においても、利用者が地域社会の一員として年齢や障害種別に関わらず本人が望む暮らしを実現できるように、様々な社会資源と連携しながら事業を運営してきた。

（2）「中期（5年間）・長期（10年間）計画」に基づく事業運営の推進

法人として、国をはじめとする行政機関の制度改正や施策の展開に対応するため、法人のリーダー層を中心とした職員で構成された中長期計画策定プロジェクトチームが、職員や関係者にニーズや意見を求め、今後の法人事業に必要な方向性を示すための「中長期計画（令和6年～15年までの10年間）」策定に向けて検討を行い、次回総会に提案に向けて準備を進めた。

（3）安定した事業運営に向けた法人事務局の体制づくり

法人として安定した事業運営を継続していくために、職員の労働環境改善のための人事制度の改革（新しい手当の創設や労務管理の見直し）を行った。また、中長期計画の実現に向けて事務局の役割はさらに重要になってくることから、事務局体制の強化について検討を進めた。

2024年度 事業報告

施設名 玉堤つどいの家

1 利用状況

事業種別： 生活介護 定員 13人 利用者数 12人

(1) 障害支援区分

| | | | | | | | |
|-----|-----|-----|----|-----|----|-------|----|
| 区分6 | 10人 | 区分5 | 2人 | 区分4 | 0人 | 区分3以下 | 0人 |
| 計 | 12人 | | | | | | |

(2) 障害の程度

| | | 身体障害者手帳 | | | | 計 |
|------------------|------|---------|----|------|----|-----|
| | | 1級 | 2級 | 3~7級 | なし | |
| 愛 の 手 帳 | 1度 | 1人 | | | | 1人 |
| | 2度 | 4人 | | | | 4人 |
| | 3~4度 | | 1人 | | | 1人 |
| | なし | 6人 | | | | 6人 |
| 計 | | 11人 | 1人 | 0人 | 0人 | 12人 |

(3) 年齢、性別

| | | | | | |
|-------|----|-------|-----|----|-----|
| 10代以下 | 0人 | 40代 | 4人 | 男性 | 7人 |
| 20代 | 1人 | 50代 | 2人 | 女性 | 5人 |
| 30代 | 3人 | 60代以上 | 2人 | 計 | 12人 |
| 計 | | | 12人 | | |

2 事業実施状況

(1) 活動・支援の内容

- ・ 開所日数243日、延べ利用者2549人、一日平均10.5人となった。利用率の年間平均は80.7%（前年度比+0.6%）と若干増加した。また、平均年齢は45.0歳と上がってきている。
- ・ シェアハウスでの生活を開始した利用者は、なかまっちでのプログラムを経て、自分で介助者に意向をしっかりと伝えることを意識しながら生活できるようになってきた。他の方もグループホームでの生活や親亡き後の生活を考える機会がより増えてきた。
- ・ 東京都福祉サービス第三者評価を受審し、指摘された点を基に改善計画を立てた。
- ・ 「YK会」様、「赤十字奉仕団（玉川地区担当）」様、ボランティアより、ご寄附いただく。
- ・ 「カラオケ」活動では、感染対策をしながら以前のような声出しをできるようにしたため一部の利用者は張り切って声を出したり、立位姿勢を取ったりしながらストレス発散につながっていた。
- ・ 「フリー」では、利用者の意向に沿った自由な活動内容を選んでいただいているが、職員数の関係上なかなか散歩に出かけられない状況が続いたが、可能な範囲で実現できるように工夫した。
- ・ 「音楽療法」を再開し、「カラオケ」同様楽しまれている方が多く見受けられた。
- ・ 「染め」活動では熱湯を使用するため、近年猛暑となる夏場の活動を控え、冬場での制作を中心に行った。ポチ袋やお札入れの売れ行きが好調なため、利用者のモチベーションにもつながり「マーブリング」活動を熱心に行う場面が多かった。
- ・ 「グループ外出」では3グループに分かれて、久しぶりの外出を楽しんでいた。
- ・ 「日帰りレク」では5年振りの外出となり、職員・ボランティアやバスの確保、利用者の高齢化や二次障害による5年前とは違った課題点が多く残った。

| | | |
|--------------|--|---|
| *行事等 | <p>4月 オリエンテーション(1日)、自衛消防訓練(9日)</p> <p>5月 誕生会(28日)</p> <p>6月 なし</p> <p>7月 うめとぴあ(23日)、誕生会(30日)、 暑中お見舞い(31日)</p> <p>8月 誕生会(28日)</p> <p>9月 グループ外出(2・3・5日)</p> <p>10月 うめとぴあ(8日)、玉堤小フェスタ(19日)、 日帰りレク(25日)、誕生会(29日)</p> <p>11月 玉川福祉フェスティバル(9日)、誕生会(26日)</p> <p>12月 区民ふれあいフェスタ(5・7日)、セントメリー 学園交流会(10日)、YK会クリスマス会(20日)、 誕生会(24日)</p> <p>1月 誕生会(21日)、新春レク(28日)</p> <p>2月 東北沢との交流会(10・17・18日)、誕生会(25日)</p> <p>3月 納会(21日)、誕生会(25日)</p> | <p>*1日の基本プログラム</p> <p>8:30 職員会議</p> <p>9:30 利用者来所</p> <p>10:10 朝の会、日中活動 (途中水分補給)</p> <p>11:00 トイレ・食事準備(職員昼食)</p> <p>11:30 前半昼食・歯磨き・トイレ</p> <p>12:10 後半昼食・歯磨き・トイレ</p> <p>13:00 昼休み</p> <p>14:00 自由時間</p> <p>14:30 帰りの会</p> <p>15:30 利用者退所</p> <p>15:45 職員会議、館内清掃・消毒</p> |
| *日中活動 | <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="225 952 1477 1019"> ・ 染め 布に動物や食べ物等の型抜きで糊を置いてデザインし、染料で染め、巾着等の製品を作成した。 <li data-bbox="225 1025 1477 1115"> ・ マーブリング 水を張った容器に染料を落とし、その上に用紙を浮かせ、幾何学的な模様を写す。ポチ袋等として商品化。好調でペースアップすることもあった。 <li data-bbox="225 1122 1477 1234"> ・ 体操 ストレッチやマッサージ、ラジオ体操等を実施した。ここ数年、気候の変化や体調不良後の回復が芳しくないため、理学療法士にアドバイスをいただきつつ無理のない範囲でストレッチ等を継続した。 <li data-bbox="225 1240 1477 1352"> ・ COM カードやiPad等の様々なツールを使用し、コミュニケーションの方法や技術の向上を図った。言語が発生しにくい利用者は「えこみゅ」というアプリの音声機能を使用し、相手に意思を伝えたり、朝会の進行をしたりと活用していた。 <li data-bbox="225 1359 1477 1449"> ・ 美化 所内の整理、備品の在庫チェックを中心に実施した。コロナ禍から使用している空気清浄機を一新し、不用品の処分等も適宜行った。 <li data-bbox="225 1456 1477 1568"> ・ 広報 広報誌の編集と作成、発送作業を実施。担当利用者が企画を考え、文章依頼や編集後記を書いたり、写真を選んだり、役割をもって積極的に実施していた。Facebookの確認・投稿も適宜実施できた。 <li data-bbox="225 1574 1477 1686"> ・ 映画会 月ごとに利用者の意向を順番に聞きながら、映画・アニメ・風景等の映像鑑賞。昨年購入したばかりのプロジェクターの不具合があり、大きな画面の映像を観られなくなったため検討していく。 <li data-bbox="225 1693 1477 1783"> ・ カラオケ 利用者のリクエストに沿った曲や映像を流し、今年度からは感染症対策を行いながら、声出しをOKとして実施しコロナ前のような雰囲気を楽しんだ。 <li data-bbox="225 1789 1477 1879"> ・ ミーティング 活動内容の検討等、様々な意見を交換し合った。今年度はグループ外出や日帰り外出についても、利用者からの様々な意見を取り入れて実施できた。 <li data-bbox="225 1886 1477 1975"> ・ フリー 利用者の意向に沿って、各自(絵画・TV視聴等)を実施。また、周辺への散歩も楽しむ方が見られた。 <li data-bbox="225 1982 1477 2047"> ・ レク 昨年度、別々に行っていた『ゲーム』と『スポーツ』活動を合わせて、『レクリエーション』活動として幅広く行った。「トランプ」「ビンゴ」「オセロ」などの | |

| | |
|-------|---|
| | 卓上ゲームや「ボーリング」「魚釣り」など身体を使ったゲームを様々楽しんだ。 |
| ・ アート | 毎月、季節を感じられる「桜」「風鈴」「みのむし」などをテーマに絵画や造形を作成した。「ハローウィン」をテーマにカボチャやオバケの型を自由に色塗りし、大きな模造紙に張り合わせた共同作品は、今年度も玉川支援ねっとの交流企画として玉川支所に展示していただいた。 |

(2) 地域交流

| | |
|---|---|
| ① | 規模を縮小しての「YK会のクリスマス会」に招待され、今年は職員利用者と共に参加した。 |
| ② | 「玉堤小フェスタ」では、言語の発声が難しい利用者が多く当所や障害理解促進のため、コミュニケーションのツールとして利用者の文字盤やトーキングエイド等の紹介を展示した。昨年同様、ミニ手話体験コーナーを実施した。 |
| ③ | 「玉川支援ねっど」ではオンライン会議を継続しつつ、アート作品の展示を玉川支所内にて行い、より多くの方々に見ていただけた。職員交流研修は「カスタマーハラスメント」をテーマに実施し、福祉現場での共通認識を持つ機会となった。 |
| ④ | 「うめとびあ」や「ぐるぐるキヌタ」、「区民ふれあいフェスタ」での販売会も好評であった。 |
| ⑤ | 一人暮らしをしている利用者は世田谷自立支援協議会シンポジウムの講演に介助ヘルパーと共に登壇し、当事者として実情を伝えた。 |

(3) 家族、関係機関との連携等

| | |
|---|--|
| ① | 来訪していただき面談を行い、難しい保護者には電話連絡や家庭訪問を実施し、さらに生活状況が変化した利用者はケア会議にも参加した。後見人や相談支援事業所との情報共有や情報交換も積極的に行った。 |
|---|--|

(4) ボランティアや実習生の受入れ

| | |
|---|--|
| ① | 5年振りにセントメリー学園との交流会や日帰りレクで長年お世話になっているボランティアとの再会ができた。また、夏のボランティア体験(夏ボラ)の他にも一般の方や駒澤大学ボランティアサークルの学生の受入れも随時行った。 |
| ② | 光明学園や区外の見学者(6/3・8/15・28)の受け入れを行ったが、実習や新規利用希望者には至らなかった。 |

(5) 危機管理

| | |
|---|---|
| ① | 新型コロナウイルスに利用者・職員各2名ずつ罹患。その他インフルエンザへの罹患、他の感染症や骨折を受傷しまう方や入院される方も多く、一年中感染症対策や細かな健康管理を徹底した。 |
| ② | 猛暑で職員室内の冷房が止まってしまうことが続いており、職員各自で体調管理に努めた。また、トイレ内の蛇口付近の水漏れ、壁のひび割れ、蛍光灯製造中止に伴うLED化の工事待ち等、建物が古く故障箇所が多く見受けられたので早急に対応してもらえるよう区に依頼中。 |
| ③ | 帰りの送迎中に強風のため送迎バスの側面に飛来物が当たる事象が発生したが、ケガや遅延には至らなかった。 |
| ④ | 台風(9/8)や強風(2/14)・降雪(3/4)の天候不良時、安全対策も実施した。 |
| ⑤ | 育児休暇中や年度途中の急な人事異動の発令に伴い、男性職員が欠員する状態が継続し、職員は細心の注意を払って健康管理は常に気を配った。また、外出行事や休暇取得に関しては当所内だけでは対応できず、BCPに基づき法人からの応援をもらい事業継続した。 |

(6) 職員研修の実施

- ①法人職員全体では「ご縁の会」に加え、「腰痛予防」「メンタルヘルス」、事業所内では「虐待防止」の研修を実施した。
- ②「令和6年度東京都サービス管理責任者実践研修及び児童発達支援管理者実践研修」や「令和6年度障害者福祉サービス等事業者に対する経営管理研修」等、研修を受講した。

(7) その他（苦情・事故等）

- ① 事故…0件
- ② ヒヤリハット…13件
送迎表・乗車人数の間違い→作成者だけでなく、ダブルチェックを徹底。さらに予定変更も漏れなく対応するため、フローチャートとチェック表も作成した。
トイレ誘導のミス→職員同士の声かけの徹底だけではなく、ご本人や異性職員も気づけるようにマグネットを提示し視覚的に分かり易く表記した。
- ③ 苦情…0件

3 重点目標への取り組み・成果

- ① 新規利用者増員に向けた取り組み
新規利用者の受入れに向けて準備を進めていたが、特別支援学校の学校公開や学園祭の一般参加は参加することができなかった。見学者の受け入れ、教諭や区の担当者との情報共有を積極的に行ったが、新規利用者の増員には至らなかった。次年度に向けては新たな取り組みを検討していく。
- ② 利用者の意向に沿った安定した生活基盤
新たにシェアハウスでの生活をスタートした利用者もいたり、グループホームや短期入居への申込みをしたり等、生活状況が変化する方が多く見られた。ご家庭の状況により、緊急短期入所もみられたが、利用者自身が心身ともに安定した生活や通所が継続できるように関係者とのやりとりする場面が多かった。
- ③ 利用者の高齢化に伴う変化への対応
新型コロナウイルスやインフルエンザへの罹患が発生するたび、重症化・感染拡大とならないよう早急かつ適切に対応した。さらに夏の猛暑が一段と厳しく長期間続き、身体への負担が大きく感じられた。また、体調不良や骨折、入院等、一年中健康観察を徹底した。今後はより医療的連携を強化していきたい。

2024 年度 事業報告

施設名 東北沢つどいの家

1 利用状況

事業種別： 生活介護 定員 7人 利用者数 9人

(1) 障害支援区分

| | | | | | | | |
|-----|----|-----|----|-----|----|-------|----|
| 区分6 | 9人 | 区分5 | 0人 | 区分4 | 0人 | 区分3以下 | 0人 |
| 計 | 9人 | | | | | | |

(2) 障害の程度

| | | 身体障害者手帳 | | | | 計 |
|------|------|---------|----|------|----|----|
| | | 1級 | 2級 | 3~7級 | なし | |
| 愛の手帳 | 1度 | | | | | 0人 |
| | 2度 | 3人 | | | | 3人 |
| | 3~4度 | | | | | 0人 |
| | なし | 6人 | 0人 | | | 6人 |
| 計 | | 9人 | 0人 | 0人 | 0人 | 9人 |

(3) 年齢、性別

| | | | |
|-------|----|-------|----|
| 10代以下 | 0人 | 40代 | 3人 |
| 20代 | 5人 | 50代 | 1人 |
| 30代 | 0人 | 60代以上 | 0人 |
| 計 | | | 9人 |

| | |
|----|----|
| 男性 | 4人 |
| 女性 | 5人 |
| 計 | 9人 |

2 事業実施状況

(1) 活動・支援の内容

- ・開所日数 242 日で延べ利用者 1430 人、一日平均 5.9 人の利用で、年間利用率 84.8%だった。前年度と比べると、一日平均利用人数に変わりはないものの、利用率で 0.7%減少した。都外施設でミドルステイされていた男性利用者 1 名が 4 月より週 3 日程度からの利用で復帰される予定であり、利用率が持ち直す事が期待される。
- ・事業所内の感染症対策・利用者各家庭での協力もあり、施設内での感染拡大などに繋がらず、1 年間事業を継続できた。
- ・本格的に対面での交流や外出を活動・行事などで再開し、利用者の地域社会とのつながりの再構築に取り組んだ。外出行事では、6 月に新宿京王百貨店に 1 日外出・10 月に渋谷マークシティに 1 日外出、11 月に宿泊旅行でお台場・スカイツリーに一泊二日にて外出（新宿戸山サンライズに宿泊）、2 月に玉堤つどいの家にて交流会を行った。特に宿泊旅行には、コロナ禍以前にボランティアとして参加してくれていた方々も再び集まってくださり、コロナ禍で途絶えていた交流を再開する事が出来た。また区内の販売会活動にも積極的に出店し、12 月のふれあいフェスタには利用者全員で販売活動に参加。保護者の方ばかりでなく、元利用者等、関りある方々との対面での交流をする事が出来た。その他、個別で近所に飲み物や昼食を買いに行ったりした。
- ・所属する利用者の地域生活の維持のために相談支援事業所やケースワーカーやケアマネジャー、成年後見人など、関係する多くの職種と連携しながら支援状況の確認や情報の共有を行った。

| ※行事等 | ※一日のスケジュール |
|---|--|
| ・4月 三者面談 うめとぴあ販売会・職員のみ (23日) | 8:30 職員ミーティング 9:45 来所時間 |
| ・5月 健康診断 (7・9・13・14・27日) 烏山もったいないバザー・職員のみ (19日) | 10:00 朝の準備・朝のミーティング 10:15 午前の活動 |
| ・6月 法人総会 (13日) 防災教室 (10日) 一日外出・新宿京王百貨店 (24日) | 11:30 昼食・昼休み 14:00 午後の活動 |
| ・7月 第三者評価アンケート実施 暑気払い (29日) | 15:15 帰りのミーティング・帰り支度 15:50 退所時間 16:00 職員会議 ほか |
| ・8月 | |
| ・9月 第三者評価訪問調査 (3日) つどいのわ発送 (21・24日) | |
| ・10月 保護者会 (7日) 避難訓練 (11日) インフルエンザワクチン接種 (19日) 一日外出・渋谷マークシティ (28日) 三者面談 | |
| ・11月 宿泊旅行・お台場&スカイツリー (18・19日) なかまっち職員による自立生活講座 (22日) | |
| ・12月 ふれあいフェスタ参加 (2・5・7日) 年賀状作成 (9・10日) 成城ホール販売会・職員のみ (20日) 忘年会 (28日) 冬休み (29~1/3日) | |
| ・1月 新年会 (27日) | |
| ・2月 玉・東利用者交流会 (10・17・18日) | |
| ・3月 保護者会 (10日) 納会 (29日) 事務整理日 (31日) | |
| ※日中活動内容 | |
| ・ セルフ | 個々の利用者のペースに合わせて、自分で予定を決めて活動した。定期的な職員との面談、体調に応じて休息を取り入れる等過ごし方ややりたい事を自分で選んで決める経験ができるように支援した。保健センター専門相談課より、作業療法士、言語聴覚士、公認心理士の派遣をいただき、より良い作業方法等のアドバイスをいただいた。 |
| ・ ミーティング | 月間活動スケジュールの確認や行事の振り返り、意見交換等を実施した。順番に利用者が進行も行い、フォローしながら主体的に進められるように支援した。自分の意見をしっかり伝えたり、場合によっては自分と異なる他者の意見を聞く事で、視野を広げるきっかけにもなった。 |
| ・ イベントミーティング | 『暑気払い』『忘年会』『納会』の所内イベントについて、レク班・飲食班に分かれて、企画・準備を実施した。利用者同士で様々な意見が出て、方向性をまとめるのに時間がかかってしまい、準備時間が短くなってしまうケースもあり、他者と一緒に計画的に物事を進める難しさも経験できた。 |
| ・ レザークラフト | 販売会の参加やオーダー品の作成に向け、革製品の作成に取り組んだ。コロナ禍以降できていなかった利用者の販売活動への参加も再開でき、地域の方々へ施設や活動、商品の認知の場となり、また利用者側のやりがいにも大きく繋がり、売れ行きも伸びた。 |

| | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 美術表現 | <p>4月：キングヨソウ、5月：母をイメージするもの、6月：時計(時の記念日)、7月：桃(三原色)、8月：絵手紙(夏)、9月：粘土アート、10月：焼き芋、11月：干支(巳)、12月：つどいマスコットキャラクター、1月：マトリョーシカ、2月：猫、3月：苺</p> <p>自身でイメージするモチーフを例年より多く取り入れ、画材やモチーフも選択し、想像することを楽しみながら作品を仕上げてもらった。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> サークル | <p>「身体を動かす」「発語・発音を通して身体機能を維持する」を目的として、ボーリングや風船バレー、トランプや坊主めくりなどを実施。雑談を交えつつ楽しめる雰囲気作りに努めた。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> リハビリ (PT) | <p>2名の理学療法士(1名毎月・もう1名は隔月で来所)の専門的な指導を受けた。毎回、活動後に職員全員で振り返りを行い、利用者個々の状況を確認しながら今後予想される問題や生活環境の変化などについて議論し、共有した。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> リラックス・リハ | <p>職員とのリハビリとして、PTとのリハビリで行ったことを振り返りながら実施。他、自身の心や体がリラックスできる時間を設け、音楽鑑賞、マッサージ、足浴など本人リラックスできるものを選択してもらい行った。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> フリー | <p>各月に利用者が1名ずつ企画担当者となり、「皆と一緒に楽しめる」企画を考案から準備・本番まで、考えてもらった。職員はそれぞれの利用者に合わせたサポートをしつつ、可能な限り利用者の意見を尊重して活動を実施してもらった。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> 生活 | <p>身近な暮らしのテーマや雑学についての知識を深めた。2024年度は「将来の生活について」というテーマに重点を置き、親元から離れて一人で暮らすために必要なことに関する知識を深めた。自身のロッカー整理等、日常から利用している空間の整理整頓にも携わってもらった。</p> |

(2) 地域交流

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 世田谷地域で開催されている各販売会への参加を本格的に再開した。12月のふれあいフェスタでは利用者全員販売側にて参加し、地域の来客者・他ブースの参加者・元利用者の方々と交流する機会が出来た。また、北沢優申会から寄付を頂いているご縁で、自主生産品のレザークラフト小物が、北沢税務署主催の中学生向け税の学習会景品として採用されるなど、地域社会に当事業所が絡む機会を作る事が出来た。 |
|---|

(3) 家族、関係機関との連携等

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 家族とは普段の連絡帳によるやり取りの他、個別支援計画の三者面談や家庭訪問、年度2回開催する保護者会等で、情報の共有を行っている。 関係機関とは、昨年に引き続き多職種連携に取り組み、個別支援計画の確認と合わせてケアカンファを当事業所で開催する事も多くなった。既に保護者が他界している利用者もおり、当事業所が得た必要な情報について、本人を中心に各機関と共有するなど多職種連携に努めた。 |
|---|

(4) ボランティアや実習生の受入れ

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 宿泊旅行や販売会活動などでのボランティア受け入れも再開し、コロナ禍以前に手伝いをしていていたボランティアの方々と繋がり再び繋ぐ事が出来た。昨年に続き、光明学園などの生徒が見学に來たりはしたものの、いずれも中学生・高校1年生等で、今年度の実習受け入れには繋がらなかった。 |
|--|

(5) 危機管理

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 気候変動により豪雨や台風による影響が年々大きくなる中、安全な送迎運営が今後に向けての大きな課題となっている。 町会など地域との災害時の連携については、引き続き継続して取り組んでいく。 |
|--|

(6) 職員研修の実施

- 入職した新人職員に、事務局による研修、法人内他事業所への研修、介助初任者研修など、新人育成プランに基づく研修を実施した。また、昨年度より導入したWEB動画研修を使用した研修会も実施したが、各職員の階層に合わせた、より計画的な活用が求められている。

(7) その他（苦情・事故等）

- ヒヤリハット 18 件**
給食キャンセル忘れ、連絡帳入れ忘れ、鍵の収納忘れ等。大きな事故には至らず未然に防げている案件が多いが、服薬や介助などに絡む内容の物もあるので、今後の支援に反映させたい。
- 苦情 1 件**
送迎時に発生した送迎車両の故障に起因する、送迎会社との連絡対応等についての苦情。
- 事故 1 件**
上記の送迎案件に関して事故報告。

3 重点目標への取り組み・成果

① 『自分らしく暮らしていく』事の考察と取り組み実施

毎回、「障害年金について」「シェアハウスについて」等、自立にまつわるテーマを設けて、利用者に考えてもらう機会を設けた。また短期入所先として、当事業所より多くの利用者が活用しているなかまっちより主任職員を講師として招き、利用者を交えて自立についての学習会を開催する等、利用者が『自分らしく暮らしていく』事に関して興味を持ち続けてもらえるよう実施した。

② 外とのつながりの再構築

一日外出や宿泊旅行といった集団での外出行事を再開した。宿泊旅行では、コロナ禍前に毎回ボランティアとして参加して下さっていた方々との再会も果たし、外出による観光だけでなく、馴染みある方々と再びつながる事が出来た。地域の販売活動への参加も再開し、12月のふれあいフェスタには利用者全員で参加した。元利用者の方や関係者の方も訪れて下さり、地域の方々に向けた販売活動だけでなく、販売を通じて施設外の方々と交流をする機会を作れた。

③ 職員の研修への取り組み

玉堤つどいの家やなかまっちへの職員応援派遣などを通じて、法人内の事業運営に関する職員の視野を広める機会があったものの、年間行事の再開や休職職員をカバーする関係で職員一人一人の業務量が増加し、個々の目標を見据えた形の計画的な研修の実施には至れていない。

2024 年度 事業報告

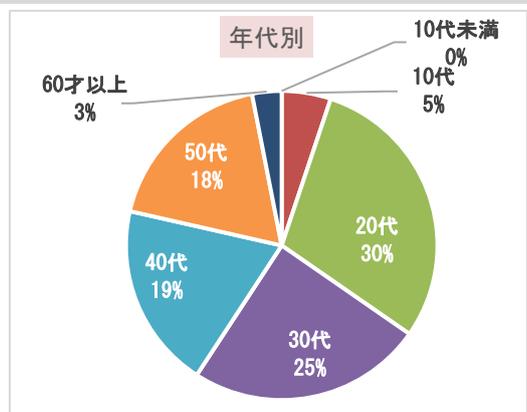
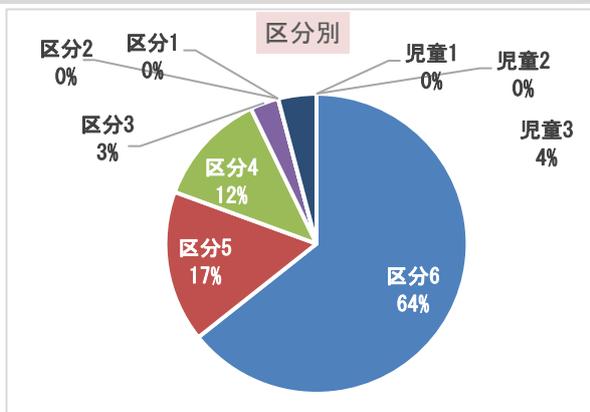
施設名 身体障害者自立体験ホーム なかまっち

1 利用状況

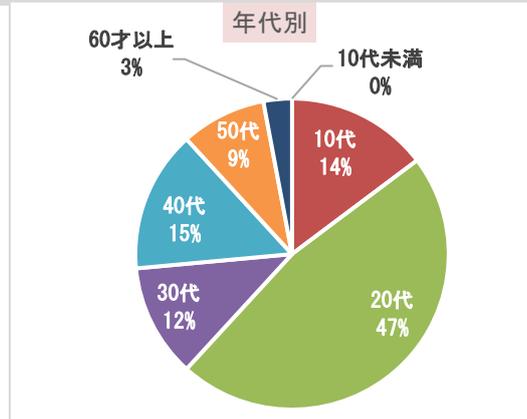
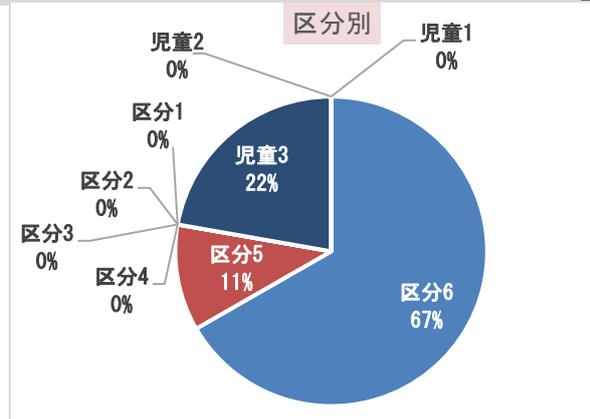
| | | 自立体験室事業 | | 短期入所事業 | | 日中ショートステイ事業 |
|------|--------|---------|--------|--------|------|-------------|
| | | 一般入居 | 短期入居 | 短期入所 | 緊急利用 | |
| 利用実績 | 利用定員 | 3人 | 2人 | 2人 | 1人 | 1~2人 |
| | 延べ利用者数 | 3人 | 259人 | 356人 | 10人 | 258人 |
| | 実利用者数 | 3人 | 10人 | 98人 | 9人 | 34人 |
| | 利用日数 | 804日 | 743日 | 1010日 | 34日 | 258日 |
| | 利用率 | 73.4% | 101.8% | 138.4% | 9.3% | 70.7% |

実利用者の内訳

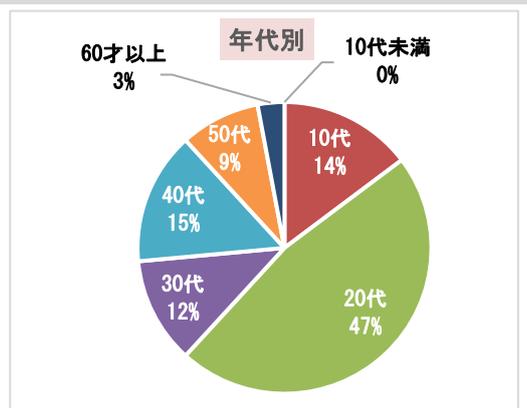
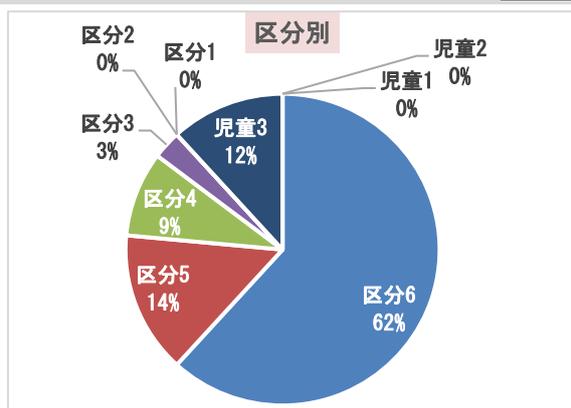
短期入所



緊急利用



日中ショートステイ



2 事業実施

(1) 活動・支援の内容

① 自立体験事業（世田谷区独自事業）

一般入居・短期入居という異なる利用期間と実施頻度を持つプログラムを通して、利用者それぞれの地域生活ニーズやライフステージに合った支援を展開した。

【一般入居（1か月以上1年以内）】

3名が利用し、3名全員がアパートでの一人暮らしに移行した。それぞれ利用当初は、一人暮らしへの不安や支援体制に課題を抱えていたが、ケースカンファレンス等で議論を重ね、なかまっちでの生活体験が自信となり、地域移行へと繋ぐことができた。

【短期入居（月数泊の利用を数年間の範囲で継続的に実施）】

2024年度からすべての利用者が新プログラムに移行し、それぞれ個別支援計画を立てそれに基づいて支援にあたった。利用率は2023年度：71.4%から2024年度：101.8%と急伸している。このような中で、今年度2名の利用者がグループホーム及びシェアハウスでの生活に、1名が一人暮らしへと移行し、また3名の利用者が自立体験一般入居へとステップアップしている。本人及び家族からは「なかまっちでの経験があつて踏み出せた」との声が寄せられている。

② 短期入所（緊急短期入所含む）事業（法内事業）

マンツーマンで介助者が対応することから、重度かつ細やかな配慮が必要な障害支援区分5～6の利用者が約8割を占めている。緊急短期入所については、世田谷区の地域生活支援拠点として、自宅での生活が一時的に困難となった方の受け入れを行っている。一方で、人手不足により支援体制が整わず緊急利用の申し込みを断らざるを得ないケースもあり、今後の課題となっている。

③ 日中ショートステイ事業（なかまっち自主事業）

レスパイトや家族の仕事などによる利用が多い。実施している事業所が少なく根強いニーズがあるが、こちらも人手不足により利用を制限しなければならない場合もあり、利用率は昨年より低下している。

年間行事

| | | | |
|-----|---|----------|------------------------------|
| 5月 | 端午の節句（季節食） | 11月 | 玉川福祉フェスティバル参加（玉川支援ねっと） |
| 7月 | 七夕（季節食） | 12月 | クリスマス（季節食） 大晦日（季節食） |
| 9月 | お月見（季節食） 玉川エリア自立支援協議会「あなたの声を教えてください」参加 | 1月 | お正月（季節食） 防災訓練 |
| 10月 | まどカフェ（ボッチャ交流会） 防災訓練（AED使用訓練） ハロウィン（季節食） | 2月 3月 | まどカフェ（バレンタイン企画） ひな祭り（季節食） |

(2) 地域交流

① 地域住民との交流・連携

昨年度より再開した「まどカフェ」を今年度は2回実施。ぽーとたまがわと共催でボッチャの体験やチョコレートのお菓子を作るなど、参加者の交流を図った。また、上野毛地区「見守り隊」の訪問を受け、地域住民・関係者との連携も強化している。

② 地域の関係機関との連携・交流

玉川エリア自立支援協議会や玉川支援ねっと（玉川地域の障害者施設等のネットワーク）に参加した。交流を通して地域課題の解決や、事業所間の関係性構築に取り組んだ。

③ 継続的な情報発信

ホームページにおけるコラムや、法人広報誌での情報発信を継続的に行った。

(3) 家族・関係機関との連携等

① 家族との連携

短期入所においては、家族と緊密に連絡を取り合い、利用毎に支援情報を更新しながら適切な支援を行えるようにした。

② 自立体験室事業におけるケースカンファレンスの開催

「個別支援計画」に基づき、支援の現状や方針について、家族や関係諸機関と情報共有を行った。また、自立体験室（短期入居）の新プログラム開始に伴い、利用者・家族とのミーティングを継続して開催した。

③ 関係機関との連携強化

「短期入所連絡会」において、短期入所を運営する他事業者との情報共有を行うことができた。また、玉川エリア自立支援協議会に参加し、地域課題の抽出や検討を行った。

(4) ボランティアや実習生の受入れ

等々力地区五者連携会議のボランティアアンケートに協力したが、ボランティア受け入れまでには至らなかった。今後再開した「まどカフェ」の開催時などにボランティアの活用を予定している。

(5) 危機管理

① 新型コロナウイルス感染症・その他感染症対応

「緊急対応マニュアル（BCP）」「ヘルパー介助マニュアル」などを随時アップデートしながら、感染防護対策や利用者支援を行った。感染防護キットの各居室設置や定期的な在庫確認を行い、いつでも利用者の体調急変があっても対応できるようにした。また、職員に対してインフルエンザ予防接種補助を実施した。

② 防災・減災

防災設備点検業者の協力を受け、火災を想定した防災訓練や、館内の防災用品・非常誘導器具などの使用訓練およびAED使用訓練を行った。また、定期的な避難路のチェック及び整備（雑草除去、排水溝のごみ除去など）や、業者による不要品の処分など、館内環境の整備に努めた。

③ 防犯

カメラ付きインターホンや防犯カメラを活用し防犯効果を高めた。また、定期的に110番通報装置の設置場所や使用方法を職員間で確認した。

(6) 職員研修の実施

① 所内研修

集合研修や研修動画（サポーターズカレッジ・お茶の水介護動画等）により、「障害福祉の制度」「依存症の基礎知識」など職員が必要な介護・支援技術等を学び直す機会を確保した。「虐待防止研修」を非常勤職員も含めて実施した。

② 法人全体研修

「ごえんの会」「腰痛予防研修」「メンタルヘルス研修」に常勤職員が参加し、職員の心身のケアへの理解及び法人職員の交流を深めた。

③ キャリアアップ研修

個別研修計画に基づき、各自研鑽を行った。研修後は研修記録を回覧し、他職員にフィードバックした。

④ 福祉動向の蓄積と支援への反映

国内外の障害支援情報の蓄積・回覧を行い、支援者が気軽に手に取れる場所に資料や書籍を置いた。

(7) その他（苦情・事故等）

- ① 事故…0件
- ② ヒヤリハット…23件
 - ・介助方法や服薬内容における誤り、コミュニケーション・連携不足、物に利用者の身体がぶつかる、利用者が興奮して物を投げる・叩くなどの行為、利用者情報の認識不足、忘れ物など。
- ③ 苦情…5件
 - ・支援者から本人の気持ちを損なう言動に対する苦情（2件）
 - ・支援者が他利用者の話題を自分の前でして不快、苦痛だった
 - ・短期入所利用日を決める電話で、電話機の不都合により業務用携帯で対応したことに対する苦情（知らない番号からの着信で出なかった）など

3 重点目標への取り組み・成果

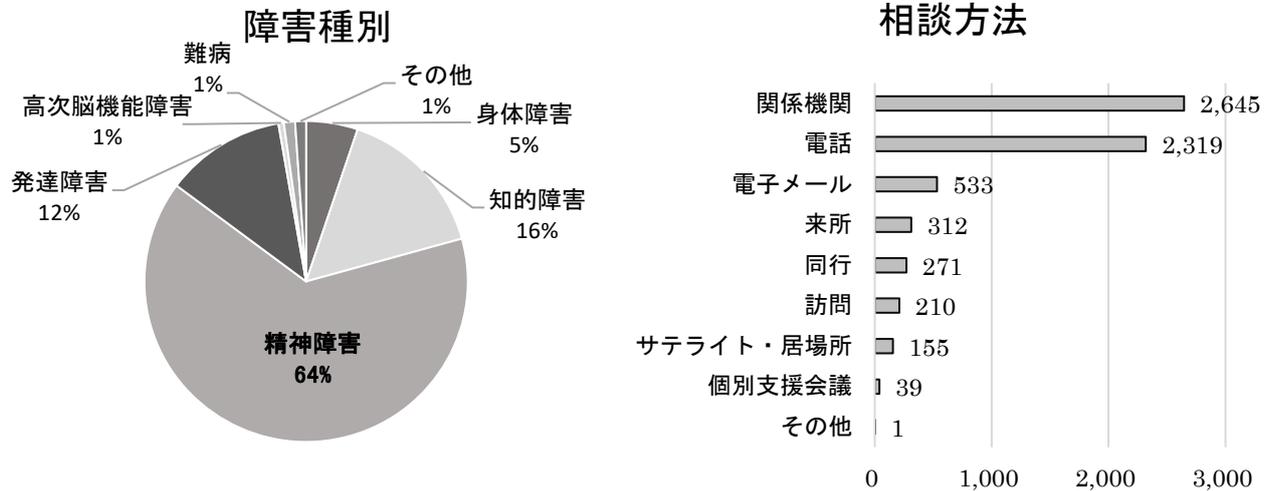
- ① 自立体験室プログラムの更なる整備と支援ノウハウの蓄積
自立体験室（一般入居・短期入居）においては、2024年度より全ての利用者が個別支援計画に基づいた新プログラムに移行し、スタッフによる支援体制の拡充を図った。また、支援結果を「月次シート」「ストレッチスマップ」「アセスメントシート」等に反映させ、支援の振り返りと地域移行プログラムのノウハウ蓄積を図ってきた。これらの取り組みの中で、一般入居3名が地域での一人暮らしへ、短期入居3名が一人暮らしやグループホーム、シェアハウスでの生活に移行している。更に、短期入居の利用を重ねていた3名が2025年度一般入居利用へとステップアップするなど、着実に支援ノウハウが蓄積できてきている。
- ② 短期入所・日中ショートステイにおける支援力向上
介護職員への負担を軽減するため、トランスや入浴などは複数のスタッフで対応、チームで支援する体制を整えた。ウェブ研修を活用し、虐待防止研修の実施とディスカッションを行い、介護職員の専門性向上とスキルアップを図った。
- ③ 事業拡張に伴う受け入れ環境の創出
自立体験室事業の稼働率増に伴い、館内を最大限活用しながらの運営が必要となるため、館内の環境整備に努めた。予算の関係から大きな修繕はできなかったが、福祉用具や居室の備品の拡充（手すりの修理・新規購入、電子レンジ、ベッドなど）を行った。また、和室におけるリフト使用ニーズもあることから、リフト導入を検討し福祉助成団体に申請したが、導入には至らなかった。次年度、再申請する予定である。

2024 年度 事業報告

施設名 地域障害者相談支援センター ぽーとたまがわ

1 利用状況

事業名：(区委託) 地域障害者相談支援センター 相談者数 370 名 相談件数 6,330 件



2 事業実施状況

(1) 活動・支援の内容

① 基本相談支援

- ・前年度に引き続き、精神障害の方の相談が全体の約7割を占めている。特に精神障害の方の相談は課題が多岐にわたっており、制度や社会資源だけでは解決できない「狭間」の相談に関しては、寄り添い、伴走をしながら粘り強く支援をしてきた。
- ・自立に向けた支援としてグループホームを利用することで親元から離れて生活を開始でき本人の目標が達成できたケースや、就労に向けた支援では、就労系のサービスを紹介することで課題を克服し一般就労への就職を達成できたケースなどもあり、本人の意向に沿った支援を提供することができた。

② 地域包括ケアシステムの推進に向けた対応

- ・四者連携会議は地区ごとに担当を決め、毎月継続して参加し、玉川地域7地区のまちづくりセンター、社会福祉協議会、あんしんすこやかセンター、児童館との連携しやすい関係を作った。特に、用賀地区においては、地域包括ケアの地区展開の事例発表会で、ぽーとの存在をアピールすることができた。
- ・障害者就労支援センター（世田谷すきっぷ、しごとねっと、ゆに、アイキャリア）から、生活面で課題があるケースの支援依頼を受けることが増えた。また、ぷらっとホーム世田谷、メルクマールせたがやからの相談が増え、連携して支援するケースも増えている。

③ エリア自立支援協議会事務局

- ・月に1回事務局会を開催し、保健福祉課、会長と協力しながら、エリア自立支援協議会が円滑に運営されるよう努めた。昨年度に引き続き「障害がある方の地域生活を支える仕組みづくり」をテーマに取り組み、グループワーク等で協議しながら課題抽出シートを使って課題を抽出した。
- ・「あなたの声を教えてください」というテーマで、地域の障害当事者やご家族に参加いただき、直接話を聞く機会を作った。就労継続支援B型のパイ焼き茶房と、すたじおごろんの2か所で開催した。

④ 指定相談支援事業者への支援

- ・年間3回の開催となったが、相談支援事業所間の情報共有や日常業務における悩みなどの意見交換ができた。また、11月には居宅介護事業者連絡会と合同で開催することができ、ヘルパー事業所と計画相談のお互いの顔の見える関係づくりを促進した。
- ・3月に開催した事例検討会では、駒沢大学の佐藤教授をお招きし、5ピクチャーズを深めることができた

⑤ 権利擁護のための支援

- ・成年後見、あんしん事業の案内や成年後見センターと連携し利用をするケースがあった。
- ・社会福祉協議会主催の福祉体験学習に協力し、障害当事者の日常生活を知ってもらう機会をつくり地域への障害啓発に努めた。

⑥ 居場所づくりへの取り組み

- ・カフェこみんを毎月1回、定例で開催。コンビニスイーツ食べ比べ、地域の農園で採れた野菜や福祉作業所製作品の販売会やなど、さまざまな企画を実施。地域住民も参加するなど参加者の幅も広がっている。
- ・ポッチャ交流会を毎月第4月曜日、玉川地域社会福祉協議会、輝水会の手塚氏の協力のもと定例で開催。新たなスポーツ、モルックも取り入れた。参加者が主体となって準備するなど自主的な動きもでてきている。

(2) 地域交流

- ・関係機関が主催するイベントや会議等に積極的に参加し、地域との顔の見える関係づくりに努めた。特にポッチャを使ったイベントを地域の関係者と共同で開催することが増えた。
- ・あんしんすこやかセンター主催の多職種連携会議や社会福祉協議会主催の地区サポーター懇談会、民生委員協議会において、ぽーとの事業や障害福祉サービスについて説明するなど運営に協力した。

(3) 家族、関係機関との連携等

- ・特に精神障害の方でどこにもつながっていないケースにおいては、医療機関や健康づくり課等と連携をとりながら、精神科クリニックにつなげたり、訪問看護を導入するなど、必要な資源につなげられるように支援した。
- ・必要に応じて、各関係機関と情報の共有、カンファレンス等において支援の方向性を検討しながら支援を進めることができた。

(4) ボランティアや実習生の受入れ

① ピアサポーターの活用

居場所事業において世田谷区のピアサポーターを派遣してもらい運営の協力を得た。

② 他機関の実習生への協力

他障害福祉サービス事業所の新人職員に対してぽーとの説明するなどの協力をした。

(5) 危機管理

① 感染症対策

引き続きマスクの着用、手洗い消毒等、引き続き感染症対策を講じながら業務にあたった。

② BCP

事業所のBCP作成のため管理者が研修に参加するなど準備を進めた。

(6) 職員研修の実施

① 内部研修

駒沢大学の佐藤教授を招いての事例検討会やサポーターズカレッジを活用した研修など、積極的に取り組み、支援力の向上を図った。

② 外部研修

東京都中部総合精神保健センターや世田谷区福祉人材育成センター主催の研修、その他機関が開催する研修及び法人内研修に積極的に参加した。また、基幹相談支援センターの開催する、ぽーとスキルアップ研修に2名が参加した。

③ 相談支援専門員初任者研修

相談支援専門員初任者研修に1名が受講した。ファシリテーターとして1名が協力した。また、主任相談支援専門員の取得を見据えて、東京都演習指導者養成研修に職員1名が参加した。

(7) その他（苦情・事故等）

① 利用者からの苦情

新規の相談者に対して初回面談を設定するまでのリアクションが遅くなってしまい、苦情の電話があった。問い合わせを含め、新規相談は毎月20件程度あるため誠実な対応を心がけた。

② 事業所管理上のヒヤリハット

暖房の切り忘れと電話の応答メッセージの切り替えミスがあった。

3 重点目標と取り組み・成果

① 複合化、複雑化したケースに対応するための支援体制を強化

毎月の相談支援ミーティングにおいて困っているケースなどを共有し、意見交換やアドバイザーから助言をもらうことで支援力の向上や均一化を促進することができた。また、ケースのニーズに応じてインフォーマルな社会資源を含め多様な機関（保健福祉センター、あんしんすこやかセンター、社会福祉協議会、児童関係機関、医療機関、福祉サービス事業所、民生委員、メルクマール世田谷、リンク、プラットホーム世田谷等）などの機関につなぎ、連携して支援した。

② 居場所づくりの取り組みをさらに発展

ポッチャ交流会、カフェこみんにおいて、参加者が定着したため、障害当事者、地域住民、ボランティアが主体的に運営に関われるような体制ができてきている。また、また、参加者が、あんしんすこやかセンター主催のポッチャや自立体験ホームなかまっちのイベントに参加し、活躍の場や地域とつながる機会を増やすことができた。

また、ぽーとたまがわの居場所を地域に周知するため、機関紙として「月刊こみん」を創刊。編集担当を決め毎月発行する体制を作った。

③ 玉川地域の指定特定相談支援事業所への支援体制を強化

年間3回の開催となったが、相談支援事業所間の情報共有や日常業務における悩みなどの意見交換ができた。また、居宅介護事業者連絡会と合同で開催する機会を作ったことで、お互いの顔の見える関係づくりを促進できた。事例検討会において、駒沢大学の佐藤教授をお招きし、「5ピクチャーズ」を深めることができ、参加事業所から好評をいただいた。来年度も佐藤教授をお招きし「5ピクチャーズ」第二弾ができればと考えている。

2024年度 事業報告

施設名 なかまっち相談室

1 利用状況

事業名：指定特定相談支援事業

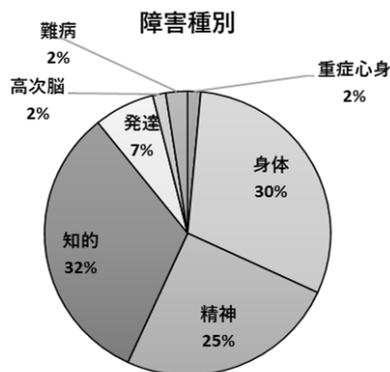
利用者数 154名

<実施件数>

| | 2024年度 | 2023年度 |
|--------|--------|--------|
| 計画作成 | 153件 | 153件 |
| モニタリング | 264件 | 215件 |
| 加算単独 | 36件 | 7件 |

<利用人数>

| | 2024年度 | 2023年度 |
|------|--------|--------|
| 全体人数 | 154人 | 156人 |
| 内、終了 | 11人 | 15人 |
| 内、新規 | 17人 | 21人 |



2 事業実施状況

(1) 活動・支援の内容

- ・ 当事業所は、障害種別からも分かるように、身体障害、精神障害、知的障害、発達障害と、障害を問わず多くの方の計画相談に対応している。重度の障害がある方、難病の方、医療的ケアが必要な方のケース、多機関がかかわるケースなどにも対応している。
- ・ 今年度も継続し効率的な計画相談実施のため、担当や支援を見直し、必要に応じて他事業所への移管や区外の方を地域の事業所に移管した。必要に応じてサービス担当者会議を開催、病院での退院カンファレンスへ出席した。丁寧なアセスメントと定期的なモニタリングを行い、本人の意向に沿った計画作成に努めた。
- ・ 区外へ移転が決まった事業所から6名の方を受け入れ、全体では新規利用者は17名となった。しかしながら、新規の依頼を断ることも多く、全体的に計画相談支援事業所の不足を痛感している。一方で、介護保険への移行、転居、他事業所への移管、就労等により、11名の方の計画相談を終了している。

3 重点目標への取り組み・成果

① 本人主体の計画

計画作成に当たって、本人、家族のニーズを丁寧に聞き取り、通所先やヘルパー事業所、訪問看護など関係機関との連携を心掛け、本人の意向を反映した目標と課題をわかりやすく表現した。

② 業務の効率化と支援の適正化

所内で定期的に会議を行い、利用者の状況や計画実施状況を共有した。ぽーととの役割分担を明確にし、担当の見直しや区外の方の他事業所への移管を進めるなど業務の効率化を図った。

本人の意向に沿った計画作成、定期的なモニタリングの実施、関係機関との連携を丁寧に行い、基本報酬の他に各種加算を算定した。法改正や求められる支援に対応した取り組みを行い、質の高い相談支援の提供に努めた。高い専門性が求められる者の支援体制のひとつ「精神障害者支援体制加算」「要医療児者支援体制加算」の要件に該当の研修を修了することで支援力向上を図り、基本報酬の引き上げにもつながり前年度比136%の増収となった。

また、昨年度、地域生活支援拠点等の整備事業の構成のひとつ「相談」を担う事業所として認定を受け、「地域生活支援拠点等相談強化加算」に対応できる体制を整え、緊急時に対応し短期入所へつなげることができた。

③ 多職種・関係機関との連携

行政、医療、福祉サービス事業所、専門機関などとの連携は定着している。利用者の退院時やサービス更新時に、適宜サービス担当者会議を実施し、スムーズに在宅生活が再開・継続できるよう、情報と支援方針の共有に努めた。

2024 年度 事業報告

施設名 グループホームきぬた

1 利用状況

事業種別： 重度身体障害者グループホーム 定員 5人 入居者数 5人

(1) 障害支援区分

| | | | | | | | |
|-----|----|-----|----|-----|----|-------|----|
| 区分6 | 4人 | 区分5 | 1人 | 区分4 | 0人 | 区分3以下 | 0人 |
| 計 | 5人 | | | | | | |

(2) 障害の程度

| | | 身体障害者手帳 | | | | 計 |
|------------------|------|---------|----|------|----|----|
| | | 1級 | 2級 | 3～7級 | なし | |
| 愛 の 手 帳 | 1度 | | | | | 0人 |
| | 2度 | 1人 | | | | 1人 |
| | 3～4度 | | | | | 0人 |
| | なし | 4人 | | | | 4人 |
| 計 | | 5人 | 0人 | 0人 | 0人 | 5人 |

(3) 年齢、性別

| | | | | | |
|-------|----|-------|----|----|----|
| 10代以下 | 0人 | 40代 | 1人 | 男性 | 5人 |
| 20代 | 0人 | 50代 | 2人 | 女性 | 0人 |
| 30代 | 0人 | 60代以上 | 2人 | 計 | 5人 |
| 計 | | | 5人 | | |

2 事業実施状況

(1) 活動・支援の内容

- 世田谷区グループホーム事業補助、及び同運営費補助に基づく、法外のグループホーム事業として2003年4月に開設し、現在に至る。「入居者一人ひとりが安心して自分らしく過ごせる自分の居場所である事、将来の夢を語れる場である事」を運営の基本理念とし、平日の日中は通所施設を利用し、介護は入居者が契約している外部のヘルパー事業所が支援に入っている。入居者の生活管理や食事の提供、夜間の対応は、グループホームスタッフがやっている。
- 医療支援については、成城リハケア病院と契約を個々に結び、定期的な訪問診療のほか、急病時の夜間休日を問わない往診ができる体制になっている。その他、歯科検診やリハビリ、訪問看護等をニーズに合わせて実施している。これまでと比べ、体調不良での入院や通所休みが増えていた。そうした場合のヘルパーの調整や通院同行も行った。今後そうしたケースへの対応が課題となってくる。
- 個人の旅行は徐々に再開されてきた。地域のイベントにも少しずつ個々の判断で参加し、休日など思い思いに楽しむ事ができた。

(2) 地域交流

- 法人格砧町自治会の活動に協力している。今年度は7月の盆踊りや9月に行われた地域防災訓練に協力・参加。防災訓練では、「要援護者救護ブース」を担当し、車いすの操作方法や簡易担架の作り方などを参加者に説明した。また、12月恒例の「イルミネーションパトロール」や防犯パトロールにも入居者とともに参加・協力した。
- 砧地域のNPOやコミュニティと共催している『ぐるぐるキヌタ』を3回開催した。毎回訪れてくれ

る人が増え、少しずつではあるが地域をつなぐイベントとして定着してきているが、入居者の関わりが増えるような形での新しい展開を模索している。

(3) 家族、関係機関との連携等

- ・ 『きぬたドーナツ通信』を4回発行し、グループホームきぬたの様子や入居者の近況を家族や関係者に伝えた。また、ホームページでも一部公開し、入居者の生活の様子を発信した。
- ・ 家族会を3回実施し、入居者の普段の様子と運営状況を報告する。
- ・ サービス等利用計画のモニタリングの際に、入居者や家族と相談員がスムーズに意思伝達できるように、日頃の様子を伝えたり情報交換を行ったりした。
- ・ 入居者の変化を見落とさないように日々の支援の中で直接支援しているヘルパーとの連携を大切にいくために、当事業所に関わりのある事業所に声をかけてヘルパー事業所連絡会を開催し、入居者に関する情報や日頃の運営に関する意見交換を行った。

(4) ボランティアや実習生の受入れ

- ・ 入居者の点字学習を補佐するボランティアに、今年も2名の協力を得る。
- ・ ぐるぐるキヌタを通じてボランティア希望があり、調理などで協力を得る事ができた。
- ・ コロナ禍から活動を再開したボランティアサークルとの交流会や学園祭などへの参加を実施する事ができた。学生たちとの交流は入居者も大いに楽しむ事ができた。
- ・ 法人のホームページやなどを経由して、新規利用希望の問い合わせが何度かあった。

(5) 危機管理

- ・ 入居者の入院事案が2件、通院を伴うケガが2件発生した。また、年末年始にインフルエンザの集団感染（入居者4名、スタッフ4名）が発生した。
入院は、尿路感染症で1週間ほどの入院とインフルエンザにより15日間ほど入院した。
通院を伴うケガは、手首の打撲と手指の骨折だった。
いずれのケースも介助者が「いつもと違う」と感じたことをきっかけに発見し、早期の対応につながることができた。
- ・ 季節性インフルエンザを含め、感染症発生時の対応をスタッフ間で再度共有見直しをし、ヘルパー事業所との連絡会で伝えている。

(6) 職員研修の実施

- ・ 法人で導入した動画研修「サポーターズカレッジ」を活用して「虐待防止」にかんする動画を鑑賞し、職員間での感想や日々の支援の振り返りを行った。「メンタルヘルス」、「腰痛予防」の法人研修に参加したが、支援体制の確保が難しい事もあり非常勤職員の参加までは実現できなかった。
- ・ 「令和6年度障害福祉サービス等事業に対する経営管理研修」を受講した。

(7) その他（苦情・事故等）

① 事故 4件

- ・ ヘルパーの勤務忘れ（1件）→他の事業所から派遣。つなぎでスタッフが対応。
- ・ 通院を伴うケガ（2件）→スタッフ・ヘルパーへの聞き取り実施。原因不明
- ・ 季節性インフルエンザの集団感染（入居者4名、スタッフ4名）→マニュアルに沿って対応

② ヒヤリハット 5件

- ・ 服薬ミス（2件）
- ・ その他（3件） 通所バック忘れ、食材の保存方法ミス、出納帳の記載漏れ → 業務内容の見直しと再確認、ダブルチェックを周知徹底した。

3 重点目標と取り組み・成果

① 本人主体の根幹となる意思決定支援の充実

「ドーナツの会」などによる入居者自身による発言の機会を設けたり、本人の判断を仰ぐ際に多様な選択肢の提示に注力したりして支援を行った。これらの取り組みを通じて、入居者が自らの意思に基づいた決定を行えるような支援に努めた。

② 高齢者サービスとの併用を見据えた体制の検討

相談支援事業やヘルパー事業所との連携を強化するため、ミーティング等で情報交換を進めた。その結果、担当ワーカーの情報量や相談支援専門員の力量によってサービス支給量に差異が生じる現状が明らかになった。今後の課題として、グループホーム内でのサービスに差異が生じないよう情報収集と他機関との連携・調整が重要となる。

③ 地域の中で役割を持って暮らし、より広い人たちと繋がる

近隣の市民運動グループなどと共催してきた「ぐるぐるキヌタ」を定期的開催した事で、毎回参加してくれる方も出てきて、入居者も地域とのつながりを実感する事ができた。また、区内外のイベントに出かけるなど、地域で暮らす土壌を育み、生活のメリハリや精神的な安定など、日常生活の質の向上につながる支援ができた。

引き続き砧町自治会活動への協力（防災訓練や防犯パトロールなど）を入居者と一緒に行った。入居者自身が地域の中で役割を持って暮らしている事を自覚する機会を得る事ができたとともに、地域住民にグループホームが認知されるよう取り組んできた。

2024 年度 事業報告

施設名 法人つどい 事務局

1. 事務局構成

事務局長、事務局員 4 名（兼務職員 2 名・非常勤職員 1 名を含む）

2. 活動実施状況

(1) 概要

【総務・人事】

- ・ 総会・理事会・運営会議などの準備、資料及び議事録等報告書の作成
- ・ 事務局ミーティングの定期的な開催を通して、各事業所の状況把握と課題への対応
- ・ 各種委員会、プロジェクトチームの活動を把握、調整、助言
- ・ 人事・採用計画、人材育成計画・研修計画、BCP(事業継続計画)などの策定及び、それを支援する情報インフラなどの整備
- ・ 人事・採用及び労務の管理
- ・ ハラスメント及びメンタルヘルスケアに関する相談、調整
- ・ 第三者委員会等の外部委員会の運営
- ・ 法人事業に関する行政との連絡調整及び申請
- ・ 会員管理（入会、退会、会費納入等）

【会計・経理・財務】

- ・ 法人本部会計管理
- ・ 法人各事業所の会計把握・管理

【広報】

- ・ ホームページ、SNS 等の管理・運営
- ・ 会員、寄付及びサポーターの募集

(2) 各種会議の開催

【総会】 6/13

【理事会】 5/21、7/16、9/17、11/12、12/17、1/21、3/18

【運営会議】 4/26、5/16、6/27、7/30、8/27、9/24、10/29、11/21、12/13、1/16、2/18、3/11

- ・ オンライン参加を含むハイブリッド形式の会議が行われ、参加者各自が望む形での会議への参加ができるよう配慮を行った。
- ・ 法人内の広報ツール「事務局通信」を隔月（年 6 回）配信し、各所で反響があった。さらに、各種会議の決定事項等について、職員への情報周知方法として定着をした。

(3) 委員会の取り組み（オンラインで実施）

① 広報委員会

- ・ 法人広報誌「つどいぷらす」21 号、22 号を発刊し、会員・関係機関に配布した。毎月委員会を実施し、下記の特集テーマについて議論・検討を重ねた。
No. 21 2024 年秋号：特集「ひろがれ！合理的配慮！！」
No. 22 2025 年春号：特集「つどいのいま 共に生きる社会を目指して」

② 研修委員会

- ・ 9/26 腰痛予防研修
- ・ 3/7 メンタルヘルス研修（労安委員会と共同開催）
- ・ 虐待防止委員会（オンライン動画研修「サポーターズカレッジ」を活用）

③ 労働安全衛生委員会

- ・ 7月 労働安全衛生法に基づくストレスチェックの実施。
後日、結果を公表した上で全国社会福祉協議会が損保ジャパンに委託している相談窓口やセルフチェックの案内・周知を行った。
- ・ 12月 腰痛予防チェックの実施。
翌年3月、委員会で講評をまとめた結果を周知した。
- ・ 3/7 メンタルヘルス研修
ストレスチェックの結果から具体的なアプローチの一つとして、研修委員会と共同開催した。

(4) その他

① 中長期計画（案）の作成及び意見交換会等の取り組み

- ・ 昨年度より発足した「中長期プロジェクトチーム」により、定期的な打ち合わせを重ねながら「中長期計画（案）」を作成した。
- ・ 「中長期計画（案）」の法人理事、職員への周知を行い、後日意見書の提出、意見交換会を実施した。その上で、理事会で報告、総会への議案上程が承認された。

② 人材育成及び資格取得支援への取り組み

- ・ 東京都が主催する障害福祉事業所を対象とした労務管理研修に、法人内数名の管理者、職員が参加した。
- ・ オンライン動画研修「サポーターズカレッジ」のさらなる周知、推進に努めた。定期的に紹介用の情報提供を行い、各事業所での活用を促進した。
- ・ 事務局主催の研修として、新人研修（入職後随時）、交流研修「ごえんの会」（7月）を行った。

③ ホームページ、SNSを活用した採用を含む広報活動の充実・整備

- ・ 昨年よりリニューアルした「お知らせ・日々の活動」の投稿が充実、SNS（X）と連携した広報活動を行った。
- ・ 利用者の活動やイベント等のお知らせ以外にも、新たに採用に繋がるPR活動にも注力した。

3. 重点目標への取り組み・成果

① 法人事務局体制の充実

各事業所事務員へ本部業務の引継ぎなどを行うことによって、業務の円滑化を図ることができた。さらに、事務局MTを毎週行い、各事業所の状況把握と課題への対応を行った。来年度以降、法人として推し進めていく「中長期計画」や「人事制度改革」を行う中で、新たな人材を確保する必要がある。

② 事業運営の改善・改革の推進への取り組み

一昨年より発足した「中長期計画プロジェクトチーム」による定期的な活動により「中長期計画（案）」が作成され、来年度以降の具体的な取り組みに向けた準備を進めることができた。「人事制度改革プロジェクトチーム」の活動による職員の処遇改善への取り組みを行い、今年度その中で「居住支援特別手当」に伴う法人独自の「居住支援調整手当」の新設、「処遇改善手当」の変更を行った。

③ 各事業所事務担当との連携体制の構築と強化

会計システムの変更の周知を目的とする説明会を実施した。各事業所の事務担当が集まる機会を増やし、一人で抱え込まずに相談できる連携体制を築き上げていく足掛かりとなった。また、課題であった法人内における全体の財務管理に加え、各事業所の会計事務や給与事務などの事務作業へのサポート体制の強化を図ることができた。